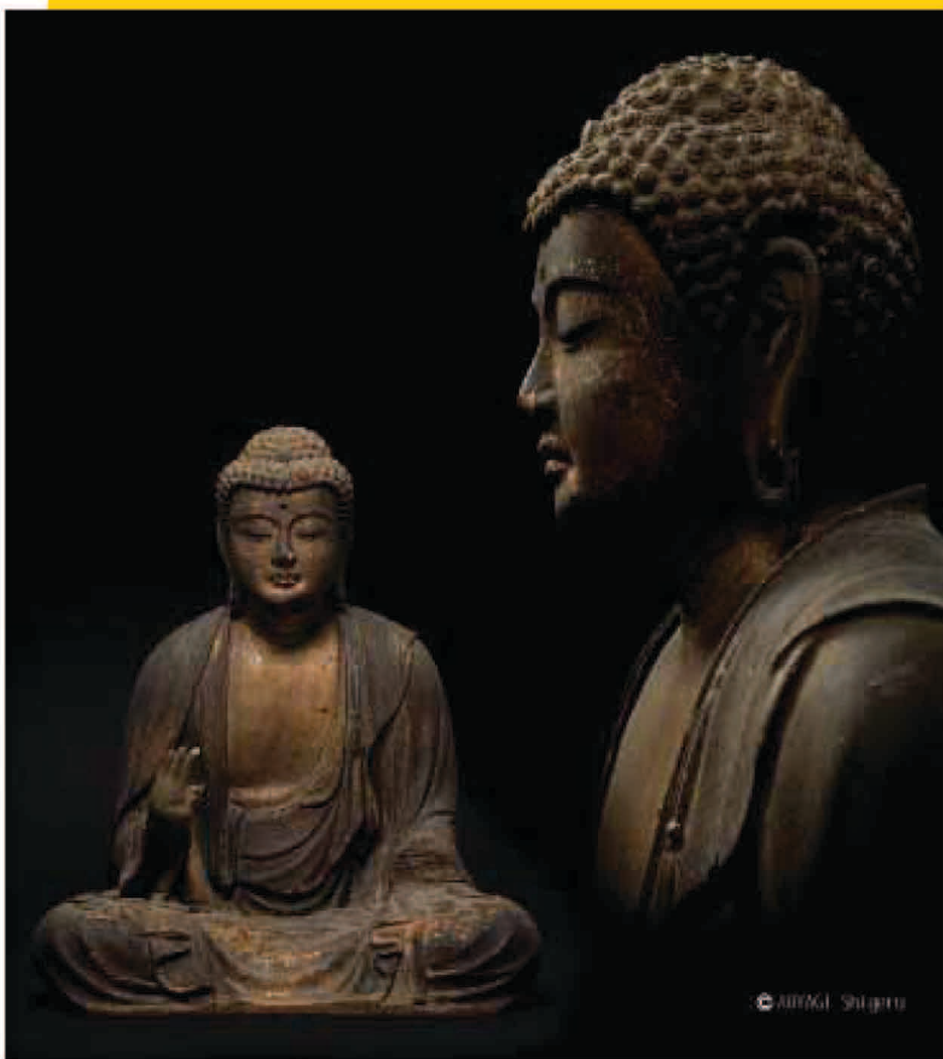


鎌倉びとの切なる願い

隆円寺の阿弥陀如来坐像（市指定文化財）



隆円寺 阿弥陀如来坐像（下今井）

下今井地区隆円寺の阿弥陀如来坐像は鎌倉時代半ば頃の作です。元々は同じ下今井にあった慶昌院というお寺に安置されていましたが、明治時代になって廃寺になったため、慶昌院の本寺である隆円寺に移されました。

端正な面立ちは少年のように瑞々しく、洗練された作風は、製作に京の仏師の関わりも想定させます。また、造られてから700年以上経った現在でも、衣には当時のままの繊細な切金（きりかね）文様をみることができます。

この阿弥陀様については、平成19年度に詳細な調査が行なわれ、ファイバースコープを用いた観察によって、像内に2通の文書が納められていることが明らかになりました。この際にその内の1通（2枚）が県立博物館の協力を得て取り出されています。

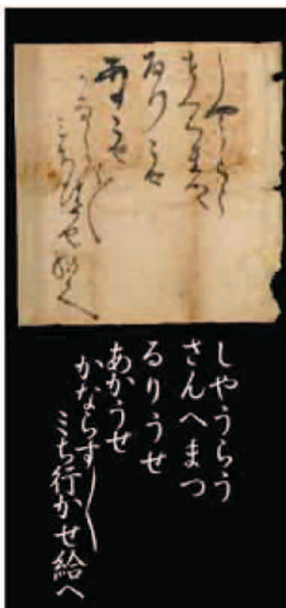
内容は、呪文や「おまじない」のようなものと思われ、全体の意味ははっきりわかりませんでした。が、「なみあみだぶつ かならずみち行かせ給え」という文言が繰り返し記されていて、この文書を書いた人（この仏像を造らせた人）が、阿弥陀様にすがり、「道」すなわち仏の道、極楽往生をひたすらに願った文書であることがわかります。阿弥陀如来に寄せる当時の人々のあつい信仰を具体的に伝える貴重な発見となりました。

鎌倉時代は、武士が力をもって争いを繰り返す、ともすれば殺伐とした時代だったという印象をもちがちですが、私たちは、この阿弥陀如来坐像に込められた生々しい、そして切なる思いにふれることによって、遙か鎌倉時代にこの南アルプス市に生きた人々も、豊かな感性をもち、死を恐れ、祈った、現代に生きる私たちと何らかわらない、同じ人間だったのだということをあらためて知ることができるのです。

※今回紹介した阿弥陀如来像は、信仰の対象であり、一般に広く公開されているものではありません。
また、納入されていた文書は調査終了後、調査前のおり像内に戻されています。



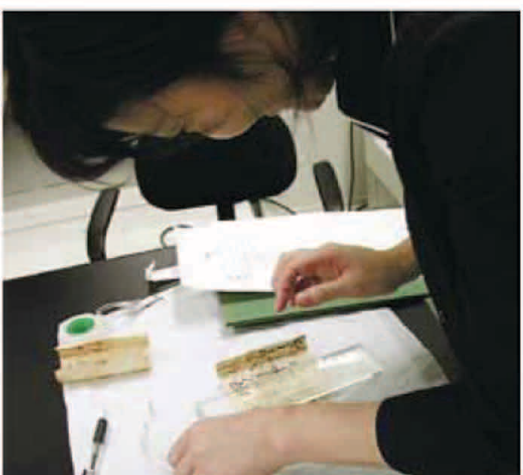
取り出された1通（2枚）の文書



ファイバースコープによる調査と像内に納められた文書



造立当初の繊細な切金文様が残る



調査の様子（山梨県立博物館）

注
切金文様 = 金箔を細い線状や小さな三角形、四角形などに切り、これを貼り付けて描いた文様